試験（成績考査）というものが今迄どれほど子供達を傷つけ、教育を偏ったものにしてきたか。それを反省してみるとき、われわれは戦慄せずにおられない。「教育の解放」は即ち「試験からの解放」である。

『教育人』一九四八年二月（新教育協会）

試験からの解放

中央教育研究所
矢口　新

一

これまで学校教育に試験とか考査とかいわれるものが如何に大きな役割を果して来たかを考えると今更の様に驚くのである。学校の生活を動かしているものは試験であったといってもよい。或は試験は太陽の如く中心であって、その他の学校の生活はその周囲をめぐる惑星の如くであった。而もそれをわれわれは全く当り前の如く考え、本来の学校生活はそもそもかくの如きものであるとして何等それに対して疑義をもたなかったのである。かくかくの形の試験考査がかくかくの方法で行われ、それによって学校の生活が進められ、それが教育の方式の当然の姿であって、なんら問題とする所のないものであった。惰性というか、伝統というか、これに対する反省の行われる余地がなかったのである。それだけにその試験のもつ意義は大きいといわねばならない。今われわれはこの試験に対して問題をもつに至ったのである。それはどうしてであろうか。

われわれの中学時代（注：旧制中学校）を思い起してみる。毎日学校へ通うわれわれの鞄の中には教科書とノートが入っている。教室では教師が教科書にもとづいて順々に説明する。生徒はこれを覚えこもうと一生懸命である。ノートは忘れることがないように記録するために使われる。これはどこにつながっているかというと、試験に於てよい成績を得ることへつながるのである。学校で学んだ事は家へ帰って復習される。復習が終れば明日の予習である。先生に説明を求める場所が何所であるかを予め発見しておくのである。これは教科書をよく覚えるために欠くことの出来ない学習であって、これがまたよりよい試験の成績をとるということへ向ってなされているのである。

学期の間に一度乃至二度の臨時試験とか本試験とかがあって、いままで習い覚えた事の総ざらいをしてどれだけ覚えたかをためすのである。試験がいつ行われるかということは一週間乃至二週間前に発表されるが、生徒の方はしきたりに従ってその事を予め知っているから、試験の期日の近づくにつれて、かなり早くから試験突破のための準備が行われるのである。これがまた学校生活の重要な内容なのである。

学校で学んだ所はこの準備期間を通じて、何回も何回も繰り返して読まれる。殆んど暗記する事が出来るようになると大体試験にはよい成績がとれることになる。比較的暗記の程度の少ない数学でも暗記することによってかなりの成績をあげることが出来る。併し暗記するばかりが能ではなかった。試験突破には山をかけることが重要な要領であった。毎年の例に従ってどこに山をかけるべきかを巧みに見ぬく生徒がいた。こういう連中は相当の成績をあげていた。

彼等はふだんから教師の言動に注意して、山をかける場所を見ぬいているのである。試験はこういう意味でも日常の生活を支配していたのである。

試験の成績は各科のものが合計されて、各生徒の間に優劣がつけられる。誰れが何番、という番号までついて発表されるのである。試験の成績がよいことは、すぐれた生徒として見られる主な、否多くの場合はほとんど唯一の条件であった。すぐれた生徒と見られることはすぐれた人間となる道を歩いていることの証明であった。そこで試験の成績には一喜一憂したわけであるけれども、またそれだけにあらゆる努力も払われたのである。試験は生徒をくすぐったり勢いづけたりする拍車であり、鞭であったことになる。

試験のためにあらゆる努力が払われた後には、教科書もノートも必要なくなるのである。一心に覚えたことも、忘れてよいような気持ちにさえなるのである。関所を一つこえた気持ちである。次にはまた新しい関所がある。ここへ向って全力をそそぐことになるのである。

試験はかくの如くわれわれの学校生活を支配していた。毎日毎日が試験突破の生活と言ってもよかった。勉強家のことを点取り虫等というのである。勉強するということの中心に試験の成績ということが、考えられていたからである。

われわれの中学時代の学校生活を振りかえってみると、かくの如く試験が中心的意義をもっていた。われわれは試験によって育てられたといってもよい。もちろん試験を度外視したさまざまの生活を持っていた。それらを通じても人間的に成長して行ったのである。併し何といっても試験という拍車と鞭によって統制された生活が学校生活の中心であり、それによって育てられたのである。試験が学校生活のあり方を決定しその生活が人間の育成をも決めていたと考えられる。

こう考えると試験が人間育成にとって如何に重要な役割を果していたかが明らかである。こういうものに対して今迄どれ程の反省が行われたであろうか。人間の育成という問題に対して、従来の如きあり方の試験がどれだけ貢献し得るかという事即ち人間の育成は極めて複雑な人間の全面的な能力についての問題であって、単純に知識のみのことではないのである。だから試験が今迄の様に学校生活にとって重要な役割を果すとすれば、そのあり方は人間育成の根本と深い関連をもって定められるべきであろう。

二

今迄の様な試験即ち主として紙に答案を書いて提出するというような方式では、それによって判定し得る事柄について一定の限界があることはやむを得ないことであろう。

併し試験は単に物をどれだけ覚えたかということを見ることしか出来ない事はない筈である。従来の試験は端的に言って、どれだけ物を覚えたかという知識の量をはかることにあったと言ってよいのである。言わば人間を知識、出来上った知識を盛る器にたとえて、この器にどれだけ知識が盛られたかを判定するのが試験の目的であったとしなければならない。

この試験の意義は必ずしも明らかに認識されていたとは言えない。それはこの試験の結果が評点となって成績の順位がつけられ、その順位が決して単に知識の獲得量だけの問題でなく、人間の問題になることにあらわれている。換言すれば、器に盛られた知識の量の大小をはかって、器の大小を決めることから、その器の大小がそのまま器のよしあしに転化することが普通なのである。併しこれは明らかにおかしい。器の大小は直ちに器の良し悪しとはいえない。器には茶椀もあれ

ばバケツもあるのである。茶椀とバケツの良し悪しは比較出来ないのであって、それぞれ特色をもっていると考えるべきである。これはたとえであるが、試験の評点をつけ成績の順位を定めるときに、われわれはこういう誤りを無意識に犯していなかったであろうか。

人間には物を覚えることにすぐれた力をもつものもいるし、技術表現によって思想をあらわすことに巧みなものもいる。複雑な現実の問題にぶつかって巧みに処理してゆくことの出来る点に於てすぐれた特色をもつものもあり、人間の才能はさまざまである。このさまざまな能力を自由に発揮する事の出来る力を与えることが出来てはじめて教育が人間育成の役割を果しているという事が出来よう。

教育した人間をどれだけ成長したかを試してみるということは大切なことであるが、それには今いったようなそれぞれの人間がどういう才能をどれだけ成長せしめつつあるかという広い見地に立ってなされなくてはならない。唯物をどれだけ覚えただけで、その人間の成長のすべての姿を描きうると考えては余りにもずさんである。従来の試験の多くは単に知識の量をしらべただけであって、而も尚その人間の全体の成長の姿を見たと誤診をしていたのではあるまいか。

試験をするはよいが、何を試験したのか．何を明らかにしたのかをいつもはっきりさせて、厳密に試験の権能を規定しておかなくてはならぬ。それでないとどれだけ物を覚えたかということの唯それだけの試験が、その人間が他の人間よりもどれだけすぐれているかを決定する権能をもっているかのように過信するのである。

こういう過信によって人間が育てられるとき、豊富な人間性を育てるよい教育とはならないのであろう。花に様々な花があり、大きな白い花もあれば、小さな赤い花もある。併しそれぞれに己れの全力をあげてその美しさを発揮しようとする所に自然の調和ある美が実現される。人間にも様々な才能の人間があり、長所あり欠点ある人間がそれぞれ全力をつくして己れの美を発揮しようと努力する所に社会が豊かとなり、調和があり得るのである。知識をもつもののみがすぐれているという考えで全人間を知識の一色で序列づけるとしたらどうであろうか。そういう社会は成り立たないのである。

教育がそういう単純なものであってはならないことは言うまでもないのであって、教育は豊かな人間観に基いて構成されていなくてはならぬ。教育は様々な所で働く様々な人間を育てるのであって、単に知識を植えつけるばかりが能でない筈である。試験が学校の生徒の生活の仕方をあれ程までに規定しているとしたら、それが生み出す生活の仕方に対しては責任があるのである。そういう生活をしてゆく中に様々な人間の様々な才能が形成されて豊かな社会人が出来上るようになっていなくてはならぬ。それぞれの生徒が試験によって己れの生活を組み立ててもよいが、そこには生徒の個性が発揮されるように生活に巾がなくてはならぬ。様々な生徒の生活が展開されるように試験がその規定力を発揮してはじめて教育的であるといい得るのである。

そうしてみると従来の如く、単に人間に点をつける試験というのは余り教育的ではないといわなくてはならぬ。教師の役割は知識の切り売りと試験の採点だったという中学の試験は何か寒けがするようなものであった。

三

われわれはおうむ返しにただ口だけの人間や頭だけの人間を作るのでなく、この現実の社会で働ける人間を作ろうとするのである。そういう教育で、人間がそのように育ちつつあるかを吟味しつつ教育をすすめることは大切なことである。試験はそのために行われるのであ

って、人間の採点をするなどという大それた事をするべきものではない。これからの試験は従来の試験という概念ではなくて、もはや別な言葉で呼ばれるのが妥当であろう。教育効果の判定等というのはその事を意味している。教育の効果の判定であって、人間の程度試験ではないのである。

教育効果の判定というのは人間の成長の過程にどれぐらい教育が役立ったかを見ることであらねばならぬ。それはすべての生徒に点をつけて序列を与えるということではなく、それぞれの生徒がいかに育成されつつあるかの分析であり、それに対して教育の手に遺憾ないかどうかの反省をすることである。それにはそれぞれの生徒の個性や彼等のもつ様々な才能が如何なる姿にあるかの精しい観察と吟味がなされなくてはならない。そうして更にその成長の過程がとらえられ、そこにはじめて教育の力がどれだけの効を致しているかの判断も可能となるのである。これらの反省に基いて今後の教育の方針も考えられ生徒の育成も方向づけ得るようになる。これが教育効果判定の意義であって、そこに試験の概念を一歩越えたものがあるといわねばならない。

教育に於て効果の判定をするとか試験をするというのは、かくの如く生徒の個性を調べ、その成長の歴史を把握し、教師や両親の指導に適確な基礎材料を与えるという為のものである。曾つてアメリカの教育事情を紹介した映画をみた際に、或る生徒の母親がハイスクールの卒業に当たって、自分の子供をどの方向に進ましむべきかという相談に教師の所へ出かけるという場面があった。そこで教師はその生徒の入学以来の成長の記録をとり出して、その生徒が如何なる個性をもち如何に成長して来たかを詳しく述べて母親の参考に供する所があった。その際のとり出された記録が個人のものであるにかかわらず膨大なものであるのに驚いたが、我が国でかかるものが果して存在するかどうかを考えさせられたのである。それは決して通信簿の如きものではあり得ないのであろうし、学籍簿の如き簡単なものでもない。

われわれは子供の頃の写真をみてその育って来た姿をなつかしむのであるが、そういうものが克明にとられていればその身体の成長は一目瞭然であろう。若し子供の精神についてもかくの如き写真とも言うべきものが残されているならば、いかになつかしい事であろう。併しそれは単に大人になってなつかしむばかりでなく、成長の途次、両親や教師や、更に自分でもそれを手がかりとして人生の歩みをつづけさせ、また自分で判断するのにどれほど有効なものたり得るであろうか。

そういうためのものとして試験があり効果判定が行われるとすれば、それは今迄のような知識の量をのみしらべるということでなく、育成についての様々な問題があらゆる視点から吟味されることにならなくてはならぬ。それはおうむ返しが出来るかどうかをしらべる今迄の試験ではあり得ないし、それによって人間を順序づけるという如き教育的には何等の意味のないものではないのである。

人間の成長を記録しこれを指導の基礎とするということになるには、その方法は科学的に多彩でなくてはならぬ。一面的でずさんな観察や記録によってはこれを教育のために用い得ないであろう。点をつけて突き放すという無責任なことならいざ知らず、教育者としてこれを以て教育の方針を定め刻々指導して行くことは不可能である。人間の成長は単に紙の上に書かれたもののみによっては測れないのであって、あらゆる場面であらゆる活動をあらゆる手段によって教師や両親や生徒自らさえもが観察し、精査しつつ作りあげて行くものである。教師も両親も生徒が何が出来るかをつかまえるのであって、何をおう

むの如く復唱するかをつかまえるのではない。如何なる力を身につけつつあるかを調べるのである。そういう力は生徒の活動、表現を通じて刻々につかまえられるべきである。生徒がそこにあらわしている活動表現はすべて生徒のなし得ることのあらわれと考えるのである。それは書くことのみでなく、物を言い、絵を描き、物を作り、身体を動かしてするあらゆる活動に於て如何なる力を所有しているかを見ようとするのである。生徒の学習活動の表現をすべてその育成の過程としてとらえて行こうとするのである。あらゆる学習活動がすべて効果判定の材料として使用さるべきである。それが即座に次の学習を規定せしむるほどであって初めて真の意義を発揮するのである。かくて効果判定は刻々の生活活動を教育的たらしむるために絶大な規定力をもっているのである。

そういう規定力は曾つて試験が生徒の生活を規定した以上に、あの様な一面的形式的でなく、動的に多面的に学習活動のあり方を規定して行くものとなるであろう

こうなると学習効果の判定と学習活動とは一体となって進行するのである。それは従来の試験とは極めて異ったものであろう。生徒はおぼえた事を或る時に吐き出してみるということでなく、刻々が効果判定であるのである。アメリカで使われているワークブックをみるとこうした状態が極めてよく想像される。ワークブックには生徒の活動によって解決すべき問題や課題が出されている。生徒はそれらの様々な問題にぶつかってそこから出発するのである。それらの問題をとくために教科書も読まれ、参考書も使われ、見学もなされ、様々な表現活動もなされる。そうして解決した問題は教師が生徒とともにこれを吟味して、どの点において欠陥があったかを反省するのである。そうして教師は、生徒を如何に指導すべきかを発見し、生徒も自らが今後どこに努力をなすべきかを自覚するのである。ワークブックは効果を判定するものであると同時に学習の指導書なのである。それはおぼえたものを試験する試験問題の集りではないのである。ここに於て学習と効果の判定とが一致したものとなっていることを明らかに見うるのである。

われわれは狭隘な試験の観念を廃棄して、人間をおうむの如く金しばりにした教育を生気あるものにしなくてはならない。教育の解放の一つの要件に試験の呪縛からの脱却ということが存しているといわなくてはならぬ。